
だいちの手の男

noracroix

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だいちの手の男

【Nコード】

N4312V

【作者名】

noracroix

【あらすじ】

もともと『神の拳銃』という名の組織に所属していたケント。

組織の命令で暗殺するはずだった謎の少女シーラ。

しかし、ケントはシーラを殺さず、政府の施設から連れ出し追われることとなった。

そして、アジトに身を潜める中、追っ手はやってきた。

三題嚙で創作に挑戦。

今回の題目は『山』『拳銃』『大砲』です。

オッス、オラ悟空！

じゃなくって……俺の名前は^{おおがみ}大狼ケン^ト。俺は今、シーラと名乗る少女と人里離れた森にあるアジトに身を潜めている。

シーラは昔の記憶を持っていない。シーラという名前も本当のものか分らない。ただ俺に名前を聞かれたときに自然と頭に浮かんだものだという。

そのシーラの暗殺、それが俺の所属していた組織『神の拳銃』から課せられた命令だった。しかし、殺すどころか今は組織を抜け出し一緒に逃げている。

シーラは俺の心を救ってくれた恩人だ。ただの殺戮マシンに成り下っていた俺に人の心をくれた。輝く銀髪と、寂しげなミスリルアイズを持つ少女。こんな色の髪や瞳をもつ人間などいない。いや、普通の人間には神々し過ぎて相応しくない。人間離れた美しさがあった。

俺がシーラに初めて会ったとき、こいつは人間扱いされてはいなかった。政府が管理する物々しい施設の中で、まるで大量殺戮兵器を警備するかのように厳重に『保管』されていた。拘束され身動き一つとれず、喋る自由も持たない管理された物だった。

人間扱いされていなのは俺も同じ。そんな少女と俺とどこかが似ている……そう感じた部分もあった。けど、少女は俺なんかとは全く違った。記憶を失くしたまま知らない連中に捕らえられている中で、誰も恐れず、憎まず、恨まず。純粹で強く、俺には眩しすぎる何かを感じてしまった。自分と似ているようで全く似ていない少女、俺の心は一瞬で彼女に奪われてしまった。

「それでも隠れているつもりか？ 組織ナンバーワンと謳われた男がコソコソと、随分と情けない」

外から響いてくる声。

「追っ手か!？」

カーテンの隙間から外を覗いた。

ケントたちが隠れる小屋の周りを、機関銃を持った兵士たちと戦車を取り囲んでいる。

戦車の大砲はすでにケントの小屋に照準を定めてある。兵士たちも銃を構え、いつでも銃撃できる状態にあった。

「貴様らに逃げ場はない。話を聞くつもりもない。いますぐここで死んでもらう!」

戦車の上に一人の男が立っていた。その男が喋っているようだ。

男は右手を真つ直ぐ天に掲げ、それを前に降ろした。

同時に轟音が轟く。戦車の砲を次々に発射。機関銃もぶつ放し集中砲火を浴びせる。弾丸が壁を蜂の巣にし、砲弾が屋根も柱も全て破壊する。逃げる隙間などない。小屋は瞬く間に崩れ瓦礫と化した。

ヘルズスパイク
『地獄の速贄』

突如、地面が揺れ動く。

大砲や機関銃の振動でそう感じるわけじゃない。明らかに地震のように揺れている。

「な、なんだ一体!？」

兵士たちがあわてふためく。

地面からメキメキと音が聞こえる。

「うわああッ!」「ぎゃああッ!」

断末魔のような兵士たちの叫びが森中に響いた。

地面が三角錐のような形になって、下から突き上げられてくる。

いくつもいくつも突き上げ、逃げる場は全くない。

高さは二メートル、三メートルはあろうか。

ある者は腹を貫かれ、宙に浮き血を滴らせている。

ある者は尖った角と角に挟まれ、圧迫し切り裂かれている。

戦車さえも貫き持ち上げられている。

本体を完全に貫き、砲塔台だけが浮かび、岩の先端で揺れている

ものもある。

逆さに突き刺さっているものも。恐らく一度ひっくり返された後に貫かれたのであろう。破壊され、爆発し、炎を上げている戦車もある。

小屋の周りは地獄絵図と化した。辛うじて生きている者の呻きが微かに聞こえる。

僅か二人を何台もの戦車と何十人もの兵士が圧倒的戦力で包囲してたはずが、一瞬にして壊滅。しかし、ケントたちの居た小屋も全壊、砲弾や弾丸で木っ端微塵になっている。この中に居て無事で済むはずがない。

その小屋から少し離れた場所に、ボコツと一メートルくらいの穴が開いた。その穴から、劇のステージで使われる奈落という装置のように、ケントとシーラが土にまみれてはいるが、平然とした姿勢でせり上がってきた。

ケントは片膝をつき、地面に右手をつけている。

二人が完全に地上へ出てくると、地面は何事も無かったかのように元通りに戻った。

見る影も無くなった小屋、血を流す兵士たち、そんな変わり果てた光景をシーラが悲しげな瞳で見渡していた。自分を殺そうとした人間を哀れみ悲しんでいるのだろうか。

「許してくれ、シーラ」

教会で懺悔をし、許しを請うような顔でケントは言った。

シーラはケントを手を両手で握り、首を左右にめいっぱい振った。

「ケントは悪くない」

その一言だけで、ケントの心は救われたような気がした。

「流石、組織最強の力と言ったところか。あれだけの戦力をたった一瞬で全滅させてしまうとは」

声は背後、しかも上の方から聞こえる。

振り向き見上げると、攻撃を指示していた司令官らしき人物が宙

に浮かんでいた。

「何者だ貴様、能力者か！」

「わたしの名前はエアー。ご覧の通り、貴方と同じ能力者だ」

組織には特殊な能力を持った能力者が何人もいる。暗殺や計略、スパイなどそれぞれの能力を活かした任務が与えられる。しかし、能力者は腐るほどいるわけではない。希少な戦力である。一つの任務に何人もの能力者を投入するわけにはいかない。能力者と能力者が一緒になる機会は少なく、能力者同士で互いの能力を把握していない。

小屋は森の中の開けた場所にあった。

森の方まで駆け込めば隠れる場所もあるかもしれないが、相手がどんな能力を持っているか分からない以上、下手に背を向け逃げるのは危険だ。

「それにしても凄い能力だね。『大血の手』^{だいち}、地面に手を触れるだけで、大地を自在に操ることのできる能力。一度は拝見してみたかったんですよ。兵士どもを差し向けてよかった。うんうん」

「まさか貴様、俺の能力を試すためにこいつらを」

「まあ余興みたいなものですよ。それにしても本当に素晴らしい。名に相応しく大地で血を吸う悪魔のような能力。さっきの弾幕は地中に逃げてかわしたんですか？ 大地を操れる貴方なら、地中に隠れる空間を作るくらい容易いですからね」

シユオ　ゴゴゴゴ　、空から唸るような音が鳴り響く。

「なんだ……あれは戦闘機！？」

空に雲をひいて飛行機が二機こちらへ飛んでくる。

「貴方と闘うのに、地を這う兵器では少々難儀ですから。わたしが刺客に選ばれたのも、この空を飛べる能力があつてのこと」

「や、ヤバい、逃げるぞシーラ。全力で走れッ！」

シーラの手を握り森へ向かって走り出す。

「そうそう、ご存知ですか？ 爆弾つてのは爆発であまり地面をえぐったりはしませんが、地中に潜って爆発する爆弾つてのもあるん

ですよ」

逃げるケントとシーラを、宙に浮いたまま悠然と眺めている。

「はあはあ……もしかして、地中貫通弾を搭載しているのか、あの戦闘機は」

「どうぞ、さっきのように地中に潜ってやり過ごしても構いませんよ」

戦闘機があつという間に迫り来る。人間の足で逃げ切れるわけがない。

二機の戦闘機は一発ずつミサイルを発射した。

ケントたち目掛けて飛んでくる。

「くっ、クソッ！」

ケントが地面に手を突く。

一発のミサイルが手前に落ちた。爆発せずに地面を削って地中へ潜っていった。

もう一発のミサイルはケントたちへ真っ直ぐ飛んできた。そして、地上でそのまま爆発。砂ぼこりが舞い、黒煙が上がった。

「けほっけほっ……」

煙の中に二人の姿があつた。無事のようにだ。

ケントたちを覆う岩の壁が、いつの間にか出来ている。

「ほっ、壁を作って防ぎましたか。戦車を貫けるだけあって頑丈ですね」

地面からグォングォンと、微かに音がする。

「さ、さっきの地面に潜った奴か!？」

シーラの腕を引っ張り、その場から走り出す。

いくばくもしない内に、足元から土や草などを巻き上げて爆発した。

二人の身体が爆風で吹き飛ばされる。

ケントは空中でシーラの身体を引き寄せしっかりと抱いた。

身体が地面に打ちつけられ、二人の身体が転がる。

「くはあっ!」

背中を強打して息が苦しい。

シーラは起き上がり、ケントの背中を摩った。

「ケント、ケント、大丈夫？ ケントお」

心配そうにケントを見つめるシーラ。

「ゲホッ……………だ、大丈夫だ……………あ、痛っう！」

ケントの足に痛みが走った。

ズボンは所々破け、血も出ている。

「さて、どうしました？ まだ終わりじゃないですよ。もう逃げないのですか」

ケントたちの上空を通過していった戦闘機が旋回して戻ってくる。

「シーラ、お前だけでも逃げる。森まで走ってどこかに隠れるんだ」

「やだ、わたしケントと一緒にじゃないと嫌。ずっと、ずっと一緒に居るんだからあ」

「シーラ……………」

やばい、このままじゃ狙い撃ちだ。下手に地中へ逃げて、貫通弾を喰らったら確実に死ぬ。壁で囲んでも普通のミサイルを防げても、貫通弾がきたらやっぱりお終いだ。

どうする……………、このままじゃシーラも殺されてしまう。俺の命はどうなってもいい、せめてシーラだけでも生き延びてくれれば俺は構わない。

何百、何千と命を奪ってきた俺だ。せめて、せめて最後くらいはたった一つの命を守りたい。シーラだけは、シーラだけは絶対に死なせはさせないッ！！

力を振り絞り、ケントは身体を起こした。

足はもう痛くて立てそうにもない。

身体を返して、四つん這いでひれ伏すように両の手をつく。

地に額をつけ、まるで神の助けを祈るように。

「フンッ、助けを請うつもりか？ 組織はそんな甘くはないぞ。その小娘と仲良く地獄へ還れ、この悪魔ッ！」

戦闘機が音速で近づき、まもなく射程距離に入る。

その時、ケントの跪く地面が光りを放った。
下から突き上げるような強い衝撃があり、泣き叫ぶかのような地鳴りが響く。

辺り一帯、全てが揺れている。

シーラも立っていられず、ケントの背中にしがみついた。

地割れが起き、地面が隆起し、土が盛り上がり小さな山ができた。その小さな山は際限なく成長する。まるで天を目指すかのように高く、高くそびえ立つ。

十メートル……三十メートル……五十メートル……百メートル……二百メートル……三百メートル。

ケントたちを目掛けて飛んでいた戦闘機。突如目の前に大きな山が立ち塞がった。

「な、何だこれはッ!？」

「このままではぶつかる、回避行動をとれッ!」

パイロットたちが操縦桿を大きく傾けた頃にはすでに遅かった。

まだまだ高く、大きくなり続ける障害物を裂けられない。

「無理だ、脱出ッ!」

脱出装置が作動し、コックピットが機体から飛び出す。

機体はそのままケントの作った山にぶつかり、二機とも爆発。

「まさか、地形をこんなに変えてしまうほどの力があるとは……」
平地に森が広がっていた土地に、森の木も巻き込んでそのまま一つの山ができてしまった。

「用意した手ごまを全て失ったか。しかたない、今日のところは退いてやる。下手に戦って能力を見せるより、いまはまだ隠しておいた方が賢明だろう。次は遊びは無した、必ずお前を殺してやるから今のうちにせいぜいその小娘と残りの人生を楽しんでおくがいい」
エアアの姿が一瞬歪んで見えたかと思ったら、そのまま姿が消えてなくなっていた。

ケントの身体が崩れ、横に倒れた。

身体がピクリとも動かない。呼吸もない。

シーラは恐る恐る、ケントの左胸に耳をつける。
心音も聞こえない。

「ケント！ ケント！ ケント！ ケントおおー！」

シーラの瞳から涙がこぼれる。

泣き崩れケントの身体に覆いかぶさった。

その時、シーラの身体が光りを放つ。

燦然と輝く光はどこか神々しい。

原始の地球で生命を誕生させた命の光のような……。

次第に光りは弱まり、消えた。

ケントの指がピクリと動く。

「う……うつん……」

シーラの耳元でケントの呻きが聞こえた。

「ケント、よかったケントお！」

ケントの首にシーラがしがみつくように抱きつく。

「ちよつ、シーラ、離れろって、シーラ」

目が覚めたと思ったら、急に抱きついてくる少女にケントは少し照れた。

そのケントの首を絞める腕の力が急に抜ける。そして、そのままケントの身体の上で動かなくなってしまった。

「お、おい、どうした……シーラ！」

ケントに不安が走り、シーラの肩を掴んで身体を揺らした。

「すう……、すう……、すう……」

落ち着いてシーラの顔を見ると、穏やかな顔をして寝息を立てていた。

「ちっ、なんだよ、驚かしやがって」

ケントは身体を起こし、眠るシーラを胸に抱いた。

「ん？」

身体が軽かった。今までに無いほど強い力を使ったはずなのに、痛みも疲労感もない。それに、足が動く。血が止まって痛みもない。「もしかして、これがお前の能力か……？ 今度は命まで救われち

まっ たな」

眠るシーラの髪をそつと撫で、しばらくその寝顔を飽きることなく見つめ続けた。

今回は何とか刺客からの襲撃を凌いだ。しかし、エア―はまだ能力を隠したまま。何れまたケントとシーラの前に立ち塞がる。次はきっと、もつと手ごわい事だろう。ただ今は、一時の休息を安らかに過ごすがいい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4312v/>

だいちの手の男

2011年8月30日03時20分発行